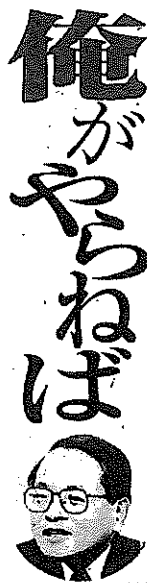


永田町新潮流 平沢勝栄



米サンフランシスコ市は最近、中国系米国人から申し入れがあった慰安婦像の寄贈を受け入れることに決めた。

2013年にも米国グレンデル市で慰安婦像が設置された。一昨年の暮れ、私は中曽根弘文参院議員と一緒に設置の経緯を調べるため、そのグレンデル市を訪れた。

関係者の話では像の設置は、同市議会の議員5人のうち4人が賛成して決まった。

この採決の直前に在米の韓国系団体は5人の議員を韓国に招待している。この招待に応じた4

人は設置に賛成し、招待を断った1人は設置に反対した。韓国がこの4人にどのような接待をしたかは不明だ。ただ、像の設置が周到に準備して行われたことだけは間違いない。日本も戦略的にこの問題に臨まない限り、こうした中韓の動きを封じ込めることはできないだろう。

ところで、今週の衆院

中韓の「慰安婦像」設置 日本は戦略的対応を



米サンフランシスコ市長のリー氏(円内)が設置を承認した慰安婦像(AP)。中韓への戦略的対応が不可欠だ

予算委員会における与野党の質問時間の割合は与党の時間が増え、「与党5、野党9」となった。野党は、与党はもっと譲歩すべきだと主張してい

るが、その場合には、次の3つをクリアすることが必要だ。

第一は質問の質を上げることだ。野党には新聞などの記事をそのまま引用しただけの質問も多い。これでは、野党に多くの時間を与える意味がないといえる。

第二は、野党は首相や閣僚の出席を常時要求することをやめるべきだ。

日本の首相は国会で年間100日以上拘束されるが、英国は35日ほど、そしてフランスやドイツは約10日だ。しかも、日本では一日中、国会に拘束されることも何日かある。確かに国会は大事だが、政務も大事だ。野党は副大臣などの答弁の活用を検討すべきだろう。

第三に、マスコミは議員の勤務評定を国会での質問回数などでしないことだ。例えば、昨年「週刊朝日」は「質問セ



与党議員の務めは政権の監視

口などの議員は国会のサボリ議員」と決めつけている。ここで批判された議員のほとんどは自民党議員だ。これらの議員の中から「自分たちにも質問させろ」という声が出てくるのは自然である。

今週の衆院予算委における与党議員の質問は、一部生ぬるいとの批判があった。しかし、全般的に見れば、与党なりの視点で政府を厳しく追及していたと思う。今後とも与党議員の務めは、政権の監視にあることを常に肝に銘じつつ、緊張感を持って国会審議に臨むべきだろう。

(自民党衆院議員)